



TITLE:

ニホンザルの遊動域要因としての植生(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

高杉, 欣一

CITATION:

高杉, 欣一. ニホンザルの遊動域要因としての植生(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1975, 4: 31-31

ISSUE DATE:

1975-01-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162598>

RIGHT:

申請4件(4名) 採択3件(3名)
5. 行動の発現機序に関する神経生理学的研究

申請5件(7名) 採択5件(7名)

6. 霊長類の生殖に関する基礎的研究

申請4件(9名) 採択4件(9名)

B. 自由課題

申請17件(20名) 採択14件(17名)

研究会課題に関しては、公募に際し特に設定主題は提示されなかった。運営委員会の議を経て5件が採択されたが、年度途中で予算の追加があったために、さらに5件が追加採択された。なお後者のうち二件は研究所主催シンポジウムとして企画されたものである。これらの研究会及びシンポジウムのテーマを列記すればつぎのとおりである。

[シンポジウム]

1. 繁殖とポピュレーション

2. 霊長類の「脳と行動」

[共同利用研究会]

1. ニホンザルの現況

2. 主としてニホンザルを対象とした行動の研究

3. 霊長類の温度適応

4. ニホンザル地域個体群の研究

5. 霊長類研究における生化学的アプローチ

6. 系統

7. ロコモーションに関するワーキング・グループ

これらの共同研究課題、シンポジウムおよび研究会に使用された費用は研究員等旅費671.7万円、校費385.5万円であった。円滑な共同利用研究活動の発展のためには大巾な増額が望まれる。(久保田競)

2. 研究成果

設定課題 1. ニホンザル地域個体群の研究

ニホンザル野生群の糞分析¹⁾

前田 憲彦(東京農工大・一般教育)

ニホンザル野生群の遊動時における群内構造 についての研究¹⁾

岩野 泰三(東大・理)

ニホンザルの遊動域要因としての植生¹⁾

高杉 欣一(東大・農)

房総丘陵のニホンザル野生群の遊動とその群 間関係の周年変化¹⁾

○ 福田喜八郎(東邦大・理)

房総丘陵のニホンザル調査は、48年度も高宕山、元清澄の両地区を集中的に行なった。

高宕山地区の調査は、昭和48年3月27日と昭和49年2、3月に3回にわたって行なわれたT-I群の大量捕獲(天然記念物の不法な侵害)のため、T-I群の保護を焦点に行なわれた。調査はT-I群の頭数の変動、その遊動を軸に、隣接群の遊動、また高宕山地区から西方の野生群の分布について行なわれ、T-Ia群については、ほぼ全数を数え、群れ構成をはっきりさせた。

元清澄山地区での調査は、隣接する複数群の同時追跡調査を主軸に行なわれ、特に11月・2月期の遊動を明らかにすることができた。

¹⁾ これらの研究者は共同して研究を行ない、一つの報告書にまとめた。

ニホンザル野生群の食餌植物、昆虫食、土食の研究は継続中であるが、食餌植物のリストは200種を越し、現在食餌植物の食される部位と植物季節および植物の分布との関連について、解析を始めている。

高宕山、元清澄山両地区を通して、フンの採集がほぼ周年的に行なわれ、分析が始まった。この分析は近々に終了する予定である²⁾。

ニホンザル志賀B₂群の遊動生活

▽ 好広 真一(京大・理)

志賀高原横湯川流域に生息する志賀B₂群を初冬期におけるニホンザルの環境利用を調べる目的で、1973年11月30日より12月15日まで連続追跡した。この冬は降雪が早く、積雪量が多く、積雪日数も長くて、ニホンザルの冬ごしの条件は例年より厳しかったと思われる。この群れは、これまで確認された限りでは、標高800~1,700mを利用している。利用地域を、支流の合流点を境にして上流と下流に分けると、この調査期には、下流域を利用していた。餌付け群のいる餌場(標高850m)よりさらに下流を利用することも見られた。これは、厳冬期における地域利用のしかたと異っている。この時期は、降雪が

²⁾ なお高宕山地区の調査報告、フン分析の途中経過、ならびに1973年までの食餌植物のリストなどは「昭和48年度、天然記念物高宕山のサル生息地総合調査報告書」(千葉県教育委員会、昭和49年6月10日発行)に収録。